



新渡戸稲造の肩書きとしては、札幌農学校教授、台湾総督府糖務局長、東京大学教授、京都大学教授、旧制第一高等学校校長、東京女子大学学長、国際連盟事務次長など洵爛たるものがありますが、今日はそういう話ではなく、その間に行なった稲造の隠れた善行や清い行いなどに光をあててお話いたします。

子供のころ、悪がきで醜い顔の稲造がたいへんいい顔に最後になっていくんですけども、それは何か？という事です。二十歳ころから晩年まで、半世紀にわたり、良い行いをしてきたからだとして私は考えています。新渡戸は、毎日の行動が善行であったため、取り立てて話すことでもないので、基本的に新渡戸は教育者です。国際人という面は有名ですが、一生涯を通じて彼は教育者でありました。生まれは盛岡市、お寺は盛岡市内の久昌寺、下の橋のたもとには生誕の地があり、現在は公園になっています。盛岡市役所の脇には銅像があって、新渡戸家のご遺族はとても似ていると言っております。新渡戸は、日本の人生相談の草分けとも言えると思います。50年以上いるんな人の相談に乗ってきました。相談者の家庭にまで入り込みお金を融通したりしておりました。



生誕の地の銅像

一人の女性がおりました。女学校を卒業後家庭の財政は借金だらけで、両親は借金をしながらも卒業させてくれた事を知ります。卒業後、これからは両親に尽していこうと決心しました。新渡戸の本を読んでいた彼女は手紙で結婚相手の事を相談をしました。「その青年が、家の借金の事を含んで結婚しようというのなら、結婚はしないように。借金の事はまったく触れないのなら結婚してもいいです。」と答えておりました。

この頃、新渡戸は交通事故に会い、入院しましたが、その事を知った彼女は神社にお百度参りをして、新渡戸の快復を祈って、その事を手紙で知らせました。新渡戸は大変感激したと言います。その後彼女は結婚しましたが、出産後肥立ちが悪く、母子共に死んでしまいました。父親に、新渡戸への感謝の言葉を

伝えて欲しいと言うのが最後の言葉だったと言います。父親からの手紙を受け取った新渡戸は、岡山に用事があった際、彼女の実家に立ち寄り、生前の写真を一枚もらい、お墓参りを行なっております。東京の自宅の机の上に写真を飾り、教え子がこの女性は誰ですかという質問に、今までの経過を説明しております。教え子は、新渡戸先生の慈愛の心はこんなにも深いのかと感動したと言います。

このように、相談者の深い所まで入り込んで対応しておりました。

ある相談で、相談者の女性が時計が無いのを見て、三年後に再会した時、時計を買って上げました。その時、女性は時計を持っておりましたが、そんな事も忘れず再会した時プレゼントしたのです。こんな行動をする新渡戸ですが、他意はありません。周囲からは誤解されたりもしましたが、他意は無かったです。講演会で貰った講演料を惜しげもなく、プレゼントにつき込んだりもしています。これは、新渡戸の善行であり、普通の事だったのです。善行を行ない続ける事を、宝積(ほうじゃく)と言います。宝積を積み重ねていったのです。この宝積という言葉が最初に使ったのが「原敬」です。岩手の偉人たちは、この宝積の精神が詰まっています。

札幌農学校時代、学校の内外で、教育者として学生達に教え続けました。子供たちを教育しなければならぬとあって、奥さんの実家から送ってもらった五千万円くらいのお金を使って夜学校を造りました。「遠友夜学校」と言います。7歳から27歳くらいまでの学校に行けない子供達に無料で教えていました。

ある日、パン屋さんで買い物したら、持ちきれないくらいのパンを貰いました。なんだろうと思ったら遠友夜学校で教えてもらった新渡戸先生に、これはお礼しなければという事だったんですね。明治27年から昭和19年まで50年間続いて閉校してしまいましたが、遠友夜学校の会が北海道に今もあります。



在りし日の遠友夜学校校舎

ある日、旭川から札幌までの乗り合い馬車での事、向かいに座った女性と一緒にの男性の様子を観察していた新渡戸は、田舎から買って来た女性を札幌の夜の街に売ろうとしていた事に気付きました。新渡戸は買値の何割増しかで私に売ってくれと申し込み、身請けしました。自宅に置いて女中として雇い、遠友夜学校に通わせ教育を受けさせました。

台湾時代、新渡戸の指導により砂糖の生産量は莫大に飛躍し、世界有数の砂糖の産地になりました。台湾で定宿にしていた宿の女中さんが何度も味噌汁をこぼして運んでくる事から何かあったと察した新渡戸は、宿の主人から子供が日本で亡くなった事を聞きます。新渡戸は一晩この女中さんを借り出し、芝居に連れて行き、泣くだけ、泣かせてあげようと思いました。この芝居は泣ける芝居だったのです。



旧制一高校長時代、森戸辰男というのちに文部大臣になった人物ですが、生徒の時代たいへん生活に困り冬を越せないような時、ふと生活費を投げ込みました。後で人伝えに聞いた森戸は大変感謝したそうです。その他にも、入学後父親が亡くなり、学費が払えない学生の学費をすべて支払ったりしていました。今の金額に換算すると数十億円稼いだはずですが、でも亡くなったときお金は葬式代金だけしか残っていません。学校の側に一軒家を借りて、相談に乗っていました。

ある学生の話です。

「君、顔色が悪いね朝ごはん食べているの？」

「あんまり食べていません」

「先生の健康法はなんですか？」

「冷水浴だよやっごらん」とか、寮の万年床の不潔さを見ると、布団の干し方などを細かく指導したり、母の日の贈り物にカーネーションだけ送って終わりではないのだよ、母を思い、産んでくれた事にいつでも感謝して生きなさい、葉書の一つでも送って現状を知らせなさいなどと、具体的に指導していました。新渡戸は、毎年母の命日に母からの手紙をすべて味わうように読み返したといひます。今の自分は、母の教えの通りの自分であろうか？と反省する日としたそうです。母への感謝の気持ちを考える根拠なのでしょう。

当時「実業之日本」という低俗な雑誌を発行している会社の顧問になります。この雑誌の記事を書いていました。同僚達は低俗雑誌への投稿はやめなさいと意見して来ましたが、高い位置の学生だけではないのだ、勉強したくても出来ない若者のために、下に降りて教えなければならない、学問より常識、正しい考え方、人生への心構えを自分は説きたい、あなた方のように閉じこもって自分が最高だと思っいてはいけない、と反論したそうです（遠友夜学校の時と同じですね）。

東京女子大学学長時代、「この学校を学校にしてはいけません」（偏差値の高い学校にしてはいけない）「家庭的な学校にしなればなりません」「人格や人柄を磨く学校にしなさい」ということだったので。新渡戸は徽章を作りました。Sを二つ組み合わせて、今もこの徽章は受け継がれています。サクリファイス&サービス、犠牲と奉仕という意味です。しかし現在偏差値の高い一流の大学になっています。新渡戸の事を教えずに卒業してから新渡戸の事を知るそうです。もっと新渡戸の意思を教える学長が現れる事を望みたいものです。

国際連盟の事務次長時代、外国の婦人をやはり助けます。ご主人を亡くしたので、その子供の学費をすべて援助し、この子を国際連盟に就職させました。そんな事もしておりました。

昭和2年に日本に帰って来て、東京中野の森本厚吉の学校の校長になります。東京女子経済専門学校はできたばかりの学校でした。これまでの経歴から、このような学校の校長に普通なるでしょうか？新渡戸はなるんですね。教え子の森本厚吉に「おまえさんのためなら尽力するよ」と言って校長になりました。森本厚吉も北大の教授でした。その森本厚吉の行動に共感したのでした。この時も「偏差値至上主義の学校にしてはいけない」と言っており、今もその教えの通り、たいへんいい学校になっています。（現在は新渡戸文化学園）

構内には新渡戸と森本の銅像が並んで立っています。その銅像に生徒達は試験の前に触れるそうです。特に英語の試験前には銅像の足を触ってから試験を受けるために銅像の足はいつも輝いているそうです。（ちなみに、この森本のお孫さんが、東京むかでクラブの森本晴生さんです。また、新渡戸も森本も英語の達人でありました。）

ある女性が、学校を建てます。「恵泉女学校」といいます。河井道さんと言う方が設立しましたが、新渡戸に設立の相談をしました。そのとき新渡戸は大反対したのです。「学校の経営は大変で忙殺されて教育なんかできないよ。」と、話したそうです。しかし数年後一人で学校を建てました。それを聞いた新渡戸は、台湾の教え子から送られた五千万円くらいのお金をそのままこの学校に寄付しました（台湾の教え子は実業家として成功していた。）新渡戸はこのようにお金を有益に使っています。そんな彼のお金の使い方に奥さんも何も言いませんでした。奥様もそんな新渡戸に賛同していたのでしょうか。

新渡戸の精神をまだまだ学んでいかなければと思っています。

(もりおかクラブ:2010年6月例会卓話)

新渡戸は5歳で父親と死に別れます、10歳で上京します。おじさんの所で暮らしますが、このおじは太田時敏と言い、脱藩者でした。ある時、新渡戸は兄に手袋を買いました。小遣いよりよほど高いものでした。このとき買えるはずがないと継母にお金を盗んだと疑われましたが、言い訳せずに耐えました。札幌農学校に進学したとき、母親が手紙を書きました。「全世界に名を上げて偉くなってくれ。お前さんのお父さんは立派だった。おじいさんも立派だった。お前さんも私に似たとは言われぬよう、名を上げなさい」という手紙です。明治の初めのお母さん方はこのような内容の手紙を子供に送っています。ほとんど共通です。また「名を上げるまで帰ってくるな」この教えを新渡戸は守って生きます。農学校を終える前年、札幌から帰郷しました。しかし実家に到着する2日前に母親は亡くなっていました。後悔の念で泣き続けたといえます。アメリカ人の奥さんと結婚して子供が生まれましたが、8日目で死んでしまいました。その後30年、「赤ん坊」とか「子供」という言葉は言えなかったといえます。人生の悲哀を数々経験して、クリスチャンになります、クエーカーです。大変ながき大将で、おじいさんは「うまく育つと、日本を代表する大物になるか、下手をすると大悪党かどちらかだな。」と言ったそうです。

留学から帰ってくる時に、知らないおばさんから呼び止められて自宅に呼ばれ「あなたは本当に良い方ですね。毎日あなたを見て、規則正しい生活、日々の努力、子供たちとの関わりを私は知っています。これからも頑張ってください」。ふだんの生活を評価してもらった瞬間でした。

このように新渡戸は、日本を良くし、日本人を良くし、時代を良くして死んでいくのが自分の使命だと心得ていました。こういう人が、かつて日本に存在したという事はめずらしいことです。私も見習いたいが、まことに程遠い状態である事に愕然とします。